

こうしんとう
庚申塔とその信仰

彦ノ内千怒越の庚申塔

9月の中旬から津久見市区長会の協力を得て、市内全域に所在する文化財の確認調査を実施してきました。

調査では、それぞれの区長はじめ関係者の皆さんにご協力いただき、事前にお届けしていた「区行事暦」「祭礼行事・年中行事」「指定・未指定の文化財リスト」などの調査票により聞き取りを行うことができました。

今回は、そうした聞き取り調査の中から、市内に数多く残っている庚申塔とその信仰について紹介します。

庚申塔とは、干支^{えと}でいう庚申^{かのえさる}の夜に宿に集まって夜を明かすという庚申信仰に基づいて建てられた石塔^{さんしせつ}のことです。そもそもこの信仰は、中国の道教の「三尸説」に端を発し、人間の体の中にいる三尸という虫が、庚申の夜に寝ている体から抜け出し、天帝に体の主の悪行を報告し、早死にさせようとするので、長生きするためにはその夜は寝ないで身を慎むようにという教えです。昔は、60日ごとに巡ってくる庚申の夜に集まって青面金剛が猿田彦を祀り、飲食をして夜を明かす庚申講が行われていたことが知られています。

庚申信仰は室町時代以降、仏教と深く結びついて広まり、特に、江戸時代にはいと盛んになり、庚申供養塔などが造立されるようになっていきました。

市内でも、在銘・無銘のもの合わせて60基を超える庚申塔が報告されています。その大半が江戸時代以降のもので、在銘の中で最も古い例は、彦ノ内千怒越にある貞享元年(1684、写真左)の造立で、今から339年前。逆に新しいものは、彦ノ内原天神社の昭和7年(1932)のもので、こうした塔は「奉待庚申塔」「青面金剛塔」などと記された文字塔や青面金剛^{かくちゆう}の像を彫り出した塔など様々で、形は角柱(墓石形)、板状型のものがほとんどです。

「庚申様」といっても信仰の対象が特定されていたわけではなく、庚申と猿との関係や庚申塔を道祖神^{どうそしん}と見る向きもあり、多岐にわたってご利益があると信じられ、広く信仰されてきました。

因みに、千怒鍛冶屋石幢^{かじやせきどう}(無銘)に「庚申」、さらに四浦久保泊石幢^{くぼどまり しゅこうしん}にも「守庚申」という文字がそれぞれ幢身に刻まれ、石幢を庚申塔として信仰されたものとして貴重なものです。特に、久保泊石幢は様式などからみて室町時代の造立で、県下でも数少ない中世の庚申塔と考えられています。そうすると市内の庚申塔の造塔時期はさらに遡るのかもしれませんが。



蔵富の庚申塔群



久保泊石幢(正面)

令和5年度市民図書館企画展
「津久見市の文化財 ～語り語り継ごう地域のたから～」

生涯学習課では、毎年11月1日～7日の文化財保護強調週間の関連行事として、この企画展を開催しています。

今回は、今年度から取組みをすすめている「津久見市文化財保存活用地域計画(以下、「地域計画」という。))」をテーマとして、計画作成の目的や概要等をわかりやすく紹介することになっています。特に、9月中旬から文化財を総合的に把握するために市内全域を対象に実施した確認調査では、身近にありながらも普段見落とされてきた多種多様な文化財を数多く確認することができました。

本展では、そうした中から、津久見ならではの文化財を紹介していくことにしています。なお、今年度も大分県立歴史博物館にご協力いただき、「出張展示」も開催することになっています。詳しくは右記のとおりです。

【開催期間】 令和5年10月31日～令和6年3月20日
※調査経過報告のため、随時、展示替えを行います。

令和6年1月23日～令和6年2月25日

※令和5年度大分県立歴史博物館出張展示

【会場】 津久見市民図書館

【内容】

○企画展

- ・「地域計画」とは
- ・「地域計画」総合調査で確認された未指定の文化財
- ・過去の調査記録「地域資源発掘事業」「巨樹・巨木林調査」から
- ・これから市内各所で行われる「霜月の祭り」ほか

○出張展示

- ・「石造美術の紹介」大分県立歴史博物館所蔵資料及び津久見市内の石造物